

第51回新潟内分泌代謝同好会

日時 平成元年7月8日(土)
午後2時開会
会場 新潟厚生年金会館

一般演題

1) 食物繊維の膨化と結合

上田 春男・山田 幸男(信楽園病院)

〔目的〕食物繊維(以下DFと略す)の働きは、水分を吸収し体積を増す膨化と、腸内物質を吸着する結合に大別される。

今回我々は、DFの胃と十二指腸における膨化の違い及び、蛋白質や糖のDFへの結合について検討したので報告する。

〔方法〕検討は試験管内で行ない、胃の中を想定して酸性溶液、十二指腸及びその他の小腸を想定して中性溶液を用いてDFを溶解し、37℃で1時間反応させた。結合については、¹²⁵Iアルブミンやオートアナライザー法により検討した。蛋白質はウシ血清アルブミン、糖はグルコースを使用した。DFは、アルギン酸Naなど18種類の精製されたものを使用した。

〔結果〕胃の中では、DF単独よりも蛋白質と共に摂取した方が膨化が大きく、十二指腸などの小腸では、蛋白質のDFの膨化に与える影響は少ないと考えられる。そして、胃で膨化されたDFは、その後も一定の体積を維持するだけでなく、十二指腸へ運ばれると膨化したものの体積が減少すると思われる。

結合についても蛋白質のDFへの結合は、胃の中においてより著しいと思われる。

糖については、膨化・結合においてDFとは無関係な結果が得られた。

2) VIP産生腫瘍に対する α -インターフェロンの効果

五十嵐一雅・他内分泌班一同(新潟大学 第一内科)

脾臓に原発し発見時既に肝への遠隔転移を認めたVIP産生腫瘍の一例である。症例は38歳男性。昭和61年8月下痢が出現。血中VIP濃度は1900pg/mlと高値であったため上症と診断し翌年1月脾尾部、脾臓、肝左葉の一部を切除。約1年間無症状であったが昭和63年3月再発。

血中VIP濃度も1400pg/mlと高く肝に多発性転移を認めた。ソマトスタチン誘導体(SMS)の投与により血中VIP濃度は410pg/mlに低下し症状は改善した。しかしSMSの増量によりescape現象が出現。SMSの投与量及び投与回数の変更により再度効果が現れ退院可能となった。しかし約1年後にSMSに対する抵抗性が出現し平成1年4月再入院。血中VIP濃度は170pg/mlと抑制されており転移巣の増大も認められなかった。SMSに加え α -インターフェロンを併用したところ3日目から効果が現れたが1週間しか持続しなかった。その原因は不明であるが、長期間有効との報告もあることから今後試みてよい治療法ではないかと考えられる。

3) 高血圧の既往を有したバーター症候群(軽症型)と思われる1例

金子 兼三(長岡赤十字病院 内科)

症例は41才男。若い頃より肥満。28才より高血圧でトリアムテレン(T)内服。昭60.7T中止後タニール、低K血症周期性四肢麻痺発症。以後62.2までアルダクトン内服。62.4PRA4.6ng/ml/h、PAC171pg/mlと高値。63.9大腿部筋痛出現。近医より低K血症、高血圧に対してK剤、polythiazide(PT)投与されたが症状の改善なく、63.12当院に入院。身長172cm、体重77kg。大腿部内側にピリピリする痛みあり。検査成績では①血清K2.4mEq/Lで、PT中止、塩分制限、K剤投与で正常化。②血圧は入院後ほとんど正常。③ACTH・コーチゾール系検査よりクッシング症候群は否定。④フロセמיד立位試験(PT中止11日目)でPRA4.2→10.4、PAC141→324と共に高値、高反応。⑤腎生検でJGAの軽度腫大あり。⑥distal fractional chloride reabsorption: 0.61と低値。⑦血清K正常化後のAIIおよびノルアドレナリンの昇圧試験正常。以上より本例はBartter症候群の軽症型と考えられ、時々の血圧上昇には肥満の関与が考えられる。

4) 当科での体外受精・胚移植

—30例の妊娠例分析より—

佐藤 芳昭・荒川 修
谷 啓光・織田 和哉(新潟大学 産婦人科)
七里 和良・三宅 崇雄

新大産婦人科での体外受精・胚移植の成績について検討した。対象の多くは卵管因子であり、男性不妊、原因不明不妊症がこれに引きつづいている。採卵率は83%で

あり、移植術あたりの妊娠は31.0%と他施設と比較して優秀な成績を得た。又その予後に関してみると、35例の全妊娠のうち、きわめて早期の流産（前臨体的流産）が12例を占めており、この対策が重要と考えられる。

冷凍保存した受精卵を解冻後再び子宮内に戻す方法では、今までは10症例（31胚数）を施行したが、妊娠例は存在しなかった。

この原因として、新鮮な体外受精に用いられた、残余の卵の保存という受精卵そのものの質の問題が存在すると考えられる。

5) 下垂体腺腫を伴った原発性無月経・食欲不振症の1例

関 義信・吉岡 光明 (新潟県立中央病院)
阿部 惇・斉藤 秀晃 (内科)

症例. 19歳, 女性. 小学生の頃より食欲不振があったが放置, 中学生の時無月経で近医受診したが無治療で経過観察. 昭和63年2月頃より上腹部不快感・嘔吐・体重減少があったため入院した. 現症は身長149cm, 体重30.4kg, 小児様顔貌で恥毛 Tanner 2°, 乳房 Tanner 1°. 翼状頸・外反肘等はなく染色体は46XXで正常. 内分泌学的には LH・FSH の連日低値を認め, 基礎体温は二相性を有さず不規則. 下垂体機能検査でアルギニン負荷試験での GH 遅延, インスリン負荷でのコルチゾールの過大反応・GRH 負荷によるソマトメジンCの無反応等下垂体機能異常が認められた. 頭部 CT で下垂体腫瘍を認め脳外科的に切除し, 組織診は好酸性下垂体腺腫であった. 術後インスリン負荷で ACTH, コルチゾールの反応が無反応となりハイドロコルチゾンの補充療法中である. 本症例は下垂体腺腫が原因と思われたが, 統計上多いように除去手術は無効であった.

6) 低 Na 血症における 5% 高張食塩水負荷時の AVP, PRA および ANP の分泌動態とその意義

鴨井 久司 (長岡赤十字病院)
内科

7) 先端肥大症の電気生理診断

—Subclinical carpal tunnel syndrome—

亀山 茂樹・長谷川 彰 (新潟大学)
黒木 瑞雄・田村 哲郎 (脳神経外科)
田中 隆一

目的: GH 産生下垂体腺腫によって起こる先端肥大

症 (Acromegaly) は軟部組織の肥厚が特徴的であり, 手根管症候群 (carpal tunnel syndrome) などは重要な症状である. 自覚的に手足のしびれを認めない Acromegaly 患者に対して, subclinical な手根管での神経障害の有無を電気生理学的に診断した. 対象と方法: Acromegaly 患者6例を対象とし, 両側正中神経を inching technique により電気刺激して, 示指から逆行性知覚神経活動電位を記録した. Kimura の方法に準じて, 0.43 ms/cm 以上の潜時の延長を異常と判定した. 結果: 術前6例中1例は両側とも異常を認めなかった. 1例は1側のみが異常であった. 4例は両側ともに明らかな異常が認められた. 潜時の延長が認められた部位は, '4' と '3' の間が4例7手と圧倒的に多く, 手根横靭帯の末梢側に一致した. 結論: 電気生理検査により, Acromegaly による subclinical な手根管症候群が診断可能であり, その頻度が高いことが示唆された.

8) 甲状腺癌に対する CDDP の臨床効果

筒井 一哉・佐藤 幸示 (県立がんセンター)
鈴木 正武 (新潟病院 内科)
(同 病理)

甲状腺癌では遠隔転移した分化癌は I-131 療法も進展例は効果がなく, 未分化癌も従来の化学療法では無効であった. 今回, 我々はこれらの甲状腺癌に対し, CDDP を14症例, 36クール施行し, その臨床効果を検討した.

固形癌直接効果判定を行なうと, 高分化癌4例では PR 1, NC 3 で奏効率は25%, 低分化癌5例では PR 2, NC 3, 40%, 未分化癌5例では CR 2, PR 2, MR 1, 80%と, 分化度が下がるほど抗腫瘍効果があった. 化学療法後の生存率曲線で検討すると, 高分化癌, 低分化癌, 未分化癌に差はなかった. また, NC 例と PR 例では生存率に差はなかったが, CR 例のみ有意に延命効果があった. 従来, 治療に全く反応しなかった未分化癌では, CDDP 使用群の MST は148日, 使用しない群は52日と有意に長かった. 副作用では大半, 3000以下の白血球減少があったが, 4週で全例, 回復した. 投与時の全身状態では PS 3 以上は, 有意に短命であった.

9) 8年間の経過観察しえた尿細管輸送異常症による低カリウム血症とバセドウ病の合併例

星山 真理 (柏崎中央病院)
内科

症例: 35才, 男性. 主訴: 下痢, 四肢筋痛, 易疲労. 家族歴: 姉が甲状腺腫腫別出. 既往歴: くり返す扁桃腺